令和7年度　能美市立粟生小学校　学校評価

重点目標（めざす姿）		具体的方策 【KGI指標】	主担当	【KPI指標：重要業績評価指標】	【評価の根拠】 達成度判断基準	取組状況 （中間評価）	評価	今後に向けて	取組状況 （最終評価）	評価	来年度に向けて
1	組織的な学校運営（チーム粟生小）	【安心・安全な学校づくり】 全教職員協力のもといじめ・不登校等の未然防止と早期発見、組織的な対応に努める。 ❶ 認知したいじめ事案の解消100% ❷学校評価アンケート（児童）「学校が安心・安全で楽しいと思う」の肯定的回答90%超え	教頭	毎月の主任会で、いじめ等記録シートにあがった児童情報の確認を行う。 ◆確認を行った割合 いじめ記録等シートをリスト化し、いじめ事案の見取りを視覚化する。 ◆リストアップした割合	認知したいじめ事案の解消 A　100% B　90～99% C　80～89% D　80%未満 学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	いじめの認知は全7件。1学期末時点での解消は100%でA。 ただし、その解消事案は1件が該当（3か月経過） 学校評価アンケートの結果は87%であり B。	B	学校を楽しいと思えていない回答した児童に焦点をあてた取組、学級としての取組の両方を考え、実践する。 認知したいじめ事案については、主任会で推移の見取りや解消の判断を行うことを継続する。	いじめの認知は全22件。2学期末での解消は14(63.6%)でにある。 ※来解消の8件は継続観察中。 学校評価アンケートの結果は82%となっておりB。	B	長期休み明けと11月の2回、学年としての子どもたちが学校生活を楽しく、安全に送ることにつながる取り組みを設定し、取り組むことを継続する。 いじめと訴えた児童については養護教諭等から定期的に声をかけ、心の安全の確保に努めることとする。
		【共通理解と共通行動】 学力向上ロードマップを用いてPDCAサイクルを実働させることで、組織的で機動的な学校運営を実践させる。 ❶学校評価アンケート（教職員）「校長ビジョンの実現にむけて自分の役割をはたすことができた」の肯定的回答90%超え	各主任	ロードマップに即して進捗状況の確認を行う ◆確認実施の割合 毎月末に学校教育目標に対してのふりかえりを行う ◆ふりかえり実施の割合	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	学校評価アンケートでの肯定的回答は100%でA。 主任層は、毎月の主任会でのロードマップを基に進捗状況の確認やねらいの再確認をすることができた。 全職員は、毎月のふりかえりを行うことで、校長ビジョンを絶えず意識して学校運営に参画できた。	A	取組状況および中間評価の結果がよいことを受け、現状の取組を継続することとする。	学校評価シートでの肯定的回答は100%でA。 主任を中心に進捗状況の確認や取り組み状況を月ごとに行うことで、ビジョンの実現に向けての共通行動をとることができた。 月末のふりかえりも確実に行うことで、職員の思いもくみ上げての学校運営につなげることができた。	A	取組状況および中間・最終評価の結果がよいことを受け、現状の取組を継続することとする。
		【業務改善とﾜｰｸﾗｲﾌﾊﾞﾗﾝｽの確立】 各教職員の専門性を生かし、適切な時間管理を行いチーム学校として最善を尽くす。 ❶時間外勤務45時間超の職員5人（22%相当）以下とする ※4月を除く	教頭	18時以降の保護者との対応を原則制限し、留守番電話とコドモンでの対応とする 最終退勤時刻が20時を超えないよう声をかける ◆退勤時刻が20時を超えなかった日数（夜に会合がある日を除く）	時間外勤務時間45時間超と5人以下となった月が A 毎月 B 毎月−1 C 毎月−2 D 毎月−3 ※4月を除く	時間外勤務45時間超の職員 5月：12名 6月：10名 1学期終了時点で「毎月－2」でC 最頻値の推移をみると 5月　50～59時間 6月　40～49時間　と減少傾向は見てとれるものの依然として厳しい状況	C	教育の質の向上のために時間外勤務時間を減らすことを再度確認する。 手厚すぎる指導や支援を控えることが子どもの主体性につながるとのマインドで、授業準備の在り方や校務の持ち方を見つめ直す。	時間外勤務45時間超の職員 5月：12名　6月：10名 7月：5名　9月：6名 10月：7名　11月：7名 12月：6名　1月：3名 2学期終了時点で「毎月－6」でD 最頻値の推移は 7、9、10、12月30～39時間 11月40～49時間と1学期に比べて現状傾向にはむかっている。	D	時間外勤務が45時間を超える職員が固定化している（校長、教頭、教務、教育相談）。 学期末の勤務時間が超過することが通例となっているが、その原因として通知表の作成が主要因となっている。記載内容を見直すことで超勤時間の削減につなげることは可能と考える。
2	知（確かな学力の育成）	【授業改善】 授業改善のための具体的取り組みを授業・共通実践し、児童の主体的・対話的な姿を見取る。 ❶学校評価アンケート（教職員） ・児童に「見通す」⇒「やってみる」⇒「振り返る」というサイクルが見られる。 ・児童は自分の考えを表現し、アウトプットしようとしている。 それぞれ90%超え	研究	具体的取り組みを校内研修会やOJTを通して共通実践にし、気づきを研究Padletに蓄積する。 ◆研究Padlet「共通実践の成果と課題」への投稿数 毎月末に具体的取り組みを実践できたかのふりかえりを行う。 ◆教育活動の振り返りの「とてもそう思う」「そう思う」の割合	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	学校評価アンケートの結果、・児童に「見通す」⇒「やってみる」⇒「振り返る」というサイクルが見られる。 ・児童は自分の考えを表現し、アウトプットしようとしている。 の両項目ともに、肯定的な回答の割合は83.3%であった。 「あてはまる」が一番多くなっており、「よくあてはまる」は3割ほどだった。	B	「よくあてはまる」と自信をもって回答できる教員が増えるように、児童の具体的な姿を目標にした共通実践を進める。1学期に行った主体的な姿に向けた「見通しを持つ」ことへの取り組みは継続しつつ、対話的な姿へ向けても、「多様な手段で説明する」ことへの取り組みも展開する。まずは、重点単元を設定し、説明やアウトプットに意識を置いた単元構想シートの作成から始めていきたい。	2学期は各学年で重点単元を設定し、共同編集可能な単元構想シートを活用した授業づくりを進めた。学校評価アンケートの結果、「児童が主体的・対話的な学び学びをするための具体的方策を実践し、振り返ることができた。」91%、「具体的方策を授業の中に取り入れることで、児童が主体的・対話的な学びをする姿に近づいた」95%で、両項目共に90%を超えているため、Aとした。	A	児童は少しずつではあるが、「主体的・対話的な学びをする姿」に近づいている。「児童が資質・能力を身に付けるに有効であったか」という視点に加え、「粟生小学校の児童に適切であったか」という視点をもとにスクラップ＆ビルドを行い、教員も児童も納得感を持って取り組める共通実践を提案し、「見通す」⇒「やってみる」⇒「振り返る」という好循環を児童一人ひとりが回せるようになることを目指す。
		【GIGAの推進と学習環境の構築】 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を意識した、児童が主体的にICTを活用する授業を行う。 ❶学校評価アンケート（教職員） ・児童が主体的にICTを授業で活用する場を提供している。（週時数の1/6以上の教員が90%以上）	教務	GIGA担当やICTサポーターと連携し、個別の教師に応じた相談に応じたり、OJTを行ったりする。 ◆支援相談、授業支援、OJTの回数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	学校評価アンケートの結果は、肯定的評価割合が82%であり B。 ・児童は自分の考えを表現し、アウトプットしようとしている。 ・肯定的評価割合のうち、「よくあてはまる」が2割で、最も多かったのは「あてはまる」で6割ほどだった。	B	ICTを活用した実践交流を行い、学年や児童に合わせた、効果的な活用方法を職員全体で共有していく。 この実践例を参考に、ICTサポーターと連携しながら、児童がICTを活用できる場面を増やしていく。 市などからのICT研修に様々な教員が参加することで、学校全体でICT活用の意欲を高めていく。	学校評価アンケートの結果は、肯定的評価割合が96%であり A。 ・肯定的評価割合のうち、「よくあてはまる」が57%と多く、「あてはまる」は39%だった。	A	GIGA担当によるICTサポーター活用の声掛けにより、職員がICTサポーターを授業や個々の相談に活用することが日常的になってきた。それにより多くの職員が授業でICT活用するようになっている。これからは教職員のニーズに合わせたOJTも行っていく。
		【基礎基本の定着】 授業、帯タイム、補充学習、家庭学習等を通して、基礎基本の定着、活用力の育成を図る。 ❶算数各単元末テストの知識・技能達成率の平均90%以上）	教務・学習指導	授業だけではなく、朝学習、チャレンジタイム、家庭学習、補充学習、昼の学習支援を行う。 ◆補充学習や昼の補充学習を行った回数	算数各単元末テストの知識・技能における達成率の平均 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	算数各単元末テストの知識・技能における達成率の平均値は87．5%であり、評価はBである。	B	朝学習や宿題の時に、ドリルや問題を何度も繰り返したり、テスト前や理解が不十分な単元で、AIドリルで復習したりして、基礎基本の計算力がついてきた。時刻、かさ、図形の単元など理解が不十分な単元では、個別支援や具体物や半具体物を使って理解を促進させる。	算数各単元末テストの知識・技能における達成率の平均値は87．9%であり、評価はBである。	B	朝学習、宿題、帯タイムによる日常的な復習や、昼の学習支援、放課後の補充学習、1、2年生の地域の方々による計算支援により、知識・技能の達成率は徐々に向上している。整数での四則演算の力をもとに、小数、分数における計算力をこれからも同様につけていく。
3	徳（豊かな人間性の育成）	【安心・安全な学級づくり】 生徒指導の4つの視点「共感的人間関係の育成」「安心・安全な風土づくり」を重点的に推進する。 ❶学校評価アンケート（児童） 「みんなで高め合おうという思いをもって、クラスや学年の人と関わることができた。」の肯定的回答90%超え	生徒指導	人間関係づくり活動（週に1回のあおトーーク、月に1回のソーシャルスキルトレーニング）を確実に実施する。 ◆月1回のSST実施の回数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	児童アンケートでは、肯定的評価割合が87%であり B。 1～3年生は肯定的評価の割合が高い一方、4～6年生の割合が低かった。 思春期に近づくにつれ、人間関係が複雑になり、グループ化する中で、関わる人が固定化していくが原因として挙げられる。	B	2学期も、人間関係づくり活動を継続していく。1組と2組でグループを混ぜたり、縦割り班で交流したりする中で、どんな相手とも関わる力の育成を目指す。 能美ライオンズクラブと連携し、ライフスキル向上プログラムを計画的に実施していく。	児童アンケートでは、肯定的評価割合が87%であり B。 前回割合の低かった4年生と6年生、そして2年生で肯定的評価割合が上がった。	B	あおクエに関しては、来年度も月に1回実施を継続していく。今年度の成果と課題を踏まえ、来年度のプログラムを見直す。 あおトーークに関しては、来年度も週に1回の実施を継続する。その際に、丁寧な言葉づかいを指導したり、「うれしい助かったありがとうの木」の取組とも関連付けたりして、児童のコミュニケーション力を高めていく。
		【自治・自主の精神の育成】 児童主体の学級活動を通して主体性・協働性を養う。 ❶学校評価アンケート（児童）「よりよい学校になる「できる」ように、児童会活動や学級活動に関わることができた。の肯定的回答90%超え	生徒指導	月に1回以上学級会を開き、伝えること、聴くこと、折り合いをつけること等の資質・能力を育むための指導を実践する。 ◆毎月の学級会の開催回数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	児童アンケートでは、肯定的評価割合が84%であり B。 「よりよいクラスを目指す中で、自分はクラスの一員として何ができるか」という意識の醸成に課題があると考えられる。	B	生徒指導部で学級会のOJTを開き、学級会の目的や進め方、議案の決定の仕方等を職員で共有する。 2学期も全学級で月に1回以上の学級会を開き、生活目標決めや学級目標のふり返り等をする中で、左記の意識の醸成を図る。	児童アンケートでは、肯定的評価割合が87%であり B。 前回割合の低かった4年生と6年生、そして2年生で肯定的評価割合が上がった。	B	月に1回の学級会活動は、来年度も継続する。ただし、低学年に関して、子どもたちが主体的に学級会を進めることが難しいという課題も見えてきた。来年度は、各学年に応じた進め方を教員間で共有する。
		【豊かな心の醸成】 言葉を大切にして思いやり、道徳教育、人権教育、キャリア教育、読書活動の充実を図り、豊かな心の醸成を図る。 ❶学校評価アンケート（教職員） 「児童が自分の考えや生活をよりよくしようという思いを持つ言葉を大切にした、道徳の授業を設計、実践した。」の肯定的回答が90%超え	道徳推進	各学期に1つ以上各学年の重点内容項目を設定し、他者の考えに触れることで自分自身の考えを見直す場のもてる授業を実践する。 ◆児童の発言や道徳ノートのふりかえり	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	教職員アンケートでは肯定的な回答をしたのが100%であった。 価値項目が抜けなく指導するためにチェック表を配布し定期的に確認してもらったり、県の道徳推進教師研修の研修内容を共有したりした。	A	「言葉を大切にした道徳の授業」の認識が人によって異なることが分かったので、共通理解を図り、2学期以降の授業づくりを行う研修を計画、実施していきたい。また、定期的に道徳ノートのふりかえりを行い、授業力の向上につなげていきたい。	教職員アンケートでは肯定的評価の割合が100%であった。 継続してチェック表で定期的に確認してもらい、価値項目の抜けがないように指導できるようにした。6年生では価値項目ごとに学担が担当する方法も実践していた。しかし、授業についての共有を行わなかったために、「あてはまる」から「よくあてはまる」になる人はいなかった。	A	現状の取り組みを継続していく中で、よい実践や取り組みなどを教職員間でより共有し、さらに道徳的価値に迫る授業を実践できるようにしていく。そして、道徳教育のさらなる充実を図る。
4	体（健やかな身体の育成）	【向上心をもって努力する児童の育成】 粘り強く取り組もうとする心を育てるために、継続的に努力を重ねようとする態度を養う。 ❶体力テストと2学期末の結果を比較し、反復横跳びの回数の全校平均が+5回	保健体育	スポチャレ（方向転換走）など、敏捷性の育成につながる取り組みを行う。 ◆月1回、教員アンケートにて取り組み状況を確認する。	体力テスト（反復横跳び）結果比較 A 学校平均＋5回 B 学校平均を維持 C 学校平均を下回る D 学校平均−5回以下	全学年、敏捷性の育成のために、体育の時間に継続して方向転換走に取り組んだ。なわとび3分間にも取り組んだが、自分でめあてを持って取り組むことができた児童は79%と低かった。	B	2学期も継続して、方向転換走となわとび3分間に取り組んでいく。特に、なわとび3分間にカを入れ、粘り強く取り組む心を育てる。	4年生以上が取り組んだ一校一プランでは、1学期の体力テストの反復横跳びと、2学期末に測定した記録を比較し、学校平均を維持した。	B	日々の体育の授業、スポチャレ（方向転換走）、なわとびの取り組みが成果につながったと考える。来年度も、課題を見つけ、強化できる取り組みを考えていく。
		【安全意識の向上】 廊下歩行の指導を行い、安全意識を高める。 ❶学校評価アンケート（児童） 「安全に過ごすために、廊下を歩くことができた」が90%超え	保健体育	体育委員から月1回程度、廊下歩行についての呼びかけを行う。 ◆指導実施の回数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	児童アンケートでは、避難経路を意識できている児童は、96%であった。 体育委員会は、週に1度、廊下歩行についての呼びかけを行なった。	A	引き続き、体育委員会が週に1度、呼びかけを行なっていく。次回の児童アンケートで廊下を歩くことができたかを確認する。	廊下歩行に関する安全意識について、「意識できた」と答えた児童は74%であった。体育委員の呼びかけの効果を検証し、対策を強化するとよかった。	C	体育委員会が実施した呼びかけの取り組みや、その他、より具体的な指導方法を考え、児童一人一人へのフォローを強化し、安全な環境づくりを目指す。
		【健康な心身の育成】 早寝早起き朝ごはんやメディアコントロールが意識できる取り組みを行い、健康で望ましい生活習慣の確立を図る。 ❶学校評価アンケート（児童） 「早寝、早起き、朝ごはんを意識して生活することができた」が90%超え	保健体育	よりよい生活習慣の確立に必要なことの理解につなげるために、基本的な生活習慣とメディアに関する指導を行う。 ◆確認実施の割合	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	アンケートで意識して生活することができた回答した児童は84%であった。ただ、メディアコントロールについて、意識している答えた児童は77%と低い結果であった。	B	生活リズムチェックで今後も自己の生活をふり返り、意識できるようにする。メディアコントロールについては、ゲームのしすぎでの寝なにについて考えることの取り組みを考えていく。	「生活リズムチェック週間」などで、家庭にも呼びかけをしたが、後期は78%と下がってしまった。また、ゲームに関しては、使用する頻度にこ極化が見られた。	C	生活習慣の確立やメディアコントロールの課題について、家庭との連携をさらに強化し、具体的な指導方法を考え、より多くの児童が習慣化できるように取り組んでいく。
5	家庭・地域との連携	【ｺﾐｭﾆﾃｨ・ｽｸｰﾙの充実】 CSDとの連携を密にし、活動をより一層充実させることで、地域との連携・協働を推進する。 ❶学習サポートの実現全学年 ❷保護者による学習等サポート累計10人	教頭	学期ごとに学習支援の計画を立てる ◆計画の立案率 該当学年の保護者にも支援の協力をよびかける ◆学習等サポートの人数	学習サポートが実現した学年の数 A 全学年 B 全学年−1 C 全学年−2 D 全学年−3 保護者による学習等サポートを引き受けていただいた人数（のべ） A 10人以上 B 6～9人 C 1～5人 D 0人	1学期の支援計画を作成し、CSDを通して依頼することができた。 1学期学習サポートが実現した学年は、3年、5年、6年の3学年。 保護者にお5学習サポートは5年生の家庭科で3名の方が引き受けていただいた。	A	学期が始まるまでに支援計画要望をCSDに提出する。 計算カードの聞き取り支援を1年、2年を対象に予定。 図工での支援を4年生で予定。 当該保護者への支援の呼びかけを行う。	学期ごとに支援計画を作成し、CSDを通して依頼することができた。 学習サポートは全学年で実現でA。 保護者の学習サポートは1年国語科、2年生の生活科、5年生の家庭科・総合、6年生の家庭科で、のべ合計29名の方に引き受けていただいたA。	A	早めの支援計画要望をCSDに提出することを継続する。 大勢の支援を必要とする学習の際には、当該学年の保護者に支援協力をよびかけることも継続する。
		【保護者との連携】 保護者、PTAと連携し、よりよい家庭生活習慣の確立に努める。 ❶学校評価アンケート（保護者）「子どものことを学校に相談すると、丁寧に対応してもらえる」の肯定的回答90%超え	教頭	コドモンのチェックを担任と教頭・教務によるダブルチェック体制を構築する。対応が必要な案件は即日対応とする。 ◆未対応でその日を終えたコメント数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	学校評価アンケートでの肯定的回答は99%でA。 コドモンに寄せられた保護者の疑問、要望を当日の内に把握し、原則その日の内に対応、連絡を返すことで信頼を得るにつながった。	A	現行の取組を継続することに加え、学校での様子を家庭に伝えるために保護者クラスルームの活用（月1回程度配信）も継続する。	学校評価シケートでの肯定的な回答は98%でA。 コドモンや電話等で寄せられた思いに対して保護者の思いに寄り添うことを原則に、迅速かつ丁寧な返信、連絡を心がけてきたのが信頼を得るにつながった。	A	現行の取組を継続することに加え、学校での様子を家庭に伝えるために保護者クラスルームの活用（月1回程度配信）も継続する。
		【ふるさと教育の充実】 地域の人・もの・ことのよさに気づき、いかす子の育成に努める。 ❶学校評価アンケート（児童）「能美市の人やもの、ことのいいところを知っている」の肯定的回答90%超	教頭	奇数月の月末に「私の思う粟生小、粟生町、能美市のいいところ」の声を集め（google form）、結果を放送、掲示する。 ◆結果の放送、掲示の数	学校評価アンケートの結果 A 90%超え B 80～89% C 70～79% D 70%未満	学校評価アンケートでの肯定的回答が82%でB。 5月と7月に声を集めた。5月に放送、掲示する機会を持ったが、能美市の良さを実感するまでには至らなかった。	B	現行の取組に加え、3年生が総合で学習した能美のいいところを全校に向けて発信する。 児童から出てきた　いいところを周知する掲示の場所をより目立つところに変更する。	学校評価アンケートでの肯定的な回答が82%でB。 7月11月と粟生小、粟生町、能美市のいいところをアンケート形式で声を集めた。周知方法が弱く、それぞれの良さを十分に実感するのには至らなかった。 3年生による学習したことの全校発表は実施できなかった。	B	能美市について学習する学年として3年と6年がある。その学年が全校や外部に向けて発表する機会をつくることで、能美市の良さを実感できる機会としていく。 CSの活動についてHPやコドモン等を通じて子どもや保護者に発信していくことで粟生の良さを広げていくことよする。

学校運営協議会より
・評価の低かったものを改善するのことも大切なのかもしれないが、評価の高かったものをアピールするマインドも大切にするとよいと思う。特に、安心・安全な学級づくりにむけて取り組みは、A評価とはなっていないが、良い取組だと思うので大切にして欲しい。安全意識の向上への取組の成果が上がらないようだが、なぜ意識が高まらないのかを深堀りし、対策を考えることも大事だと考える。